

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 9 日現在

機関番号：56401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720346

研究課題名(和文) 戦間期オーストリアにおける優生思想の普及と展開

研究課題名(英文) The spread and development of the eugenic thoughts in Interwar Austria

研究代表者

江口 布由子 (Eguchi, Fuyuko)

高知工業高等専門学校・総合科学科・准教授

研究者番号：20531619

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では戦間期のオーストリアにおける児童福祉を焦点に、戦間期オーストリアにおける優生思想の実践を解明することを目的とした。先行研究は、一般には優生学に拒否的だったとされるオーストリアの知的エリートの優生学的言論を多方面から明らかにしてきた。この先行研究の成果を受け、本研究は児童福祉という実践現場に注目し、父親鑑定という現場の問題解決のために優生学の主張する「科学的」知見を導入したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project explores the praxes of eugenic thoughts in interwar Austria, focusing on issues of child welfare. Recent investigations have demonstrated various eugenic discourses of the intellectuals. This research finds out that the very praxes of the welfare, which longed for the way of paternity test, introduced and used the “scientific” knowledge of eugenics.

研究分野：西洋史

キーワード：オーストリア史 優生学史 児童福祉史 現代史

1. 研究開始当初の背景

本件研究は、優生思想の「実践」の場として児童福祉を想定し、オーストリアの優生思想の普及と展開を明らかにすることを目的としたものである。20世紀ヨーロッパ史において優生思想の歴史的展開はなお重要な課題として議論されている。とりわけナチズムをはじめとする戦間期の政治社会と福祉国家の関連性あるいは断絶性を考える上で決定的なファクターとなる。近年、これまで十分に明らかにされていなかった東中欧における優生思想の展開が福祉政策や福祉実践との関係において考察されるようになった。

(1) オーストリア優生思想に関する研究の「遅れ」

しかし、30年近くにわたり続けられてきた西欧や北欧に関する研究状況とは対照的に、東中欧についての優勢思想の展開は近年、ようやく始まったばかりである。とくに本研究が対象とするオーストリアに関しては「遅れ」ている。管見の限りではあるが、少なくとも日本における研究は「ドイツ語圏」の枠組みで補足的に触れられるほかは皆無に等しい。

この「遅れ」にはオーストリア特有の理由があった。大きな理由のひとつは、同時代におけるオーストリア優生学の制度や組織、人的集団の非統一性である。優生思想の発展において決定的な時期とされる19-20世紀転換期において（二重君主国全体という意味でも、また西半分のチスライタという意味でも）「オーストリア」全体をカバーする優生学系組織は存在しなかった。君主国解体後にはオーストリア共和国レベルでの組織が設立されるが政治陣営の亀裂は深く、優生学者や優生思想を持つ専門者や政策担当者たちのあいだで求心力を持たなかった。つまり、オーストリアでは、政治的対立を超えた優生思想・政策の共有というとくにドイツで顕著に見られるような特徴が現れなかった。そのため「オーストリア」としての特徴を抽出しにくいという状況があった¹。

しかし、それ以上に決定的な理由は、オーストリアにおける「過去の忘却」である。上述のように、優生思想・優生政策研究の多くは、その端緒におい

てナチズムとの関連性という問題意識を持っていた。一方、第二次世界大戦後のオーストリアのナショナル・アイデンティティは「ナチスの犠牲者」という神話を核としており、個人としても国家としてもナチズムへの直接的、主体的関与という過去は忘却されなければならなかった。それゆえ意識的ではないとしても一般にナチズムの代名詞となっていた優生思想・優生政策を探求することは忌避され、これが研究の「遅れ」をもたらす土壌となった。

(2) 1990年代後半以降の先行研究と課題

オーストリアにおける優生思想・優生政策に関する実証研究がようやく本格化するのは1990年代後半になってからのことである。1998年には医療史を中心にナチス期のオーストリアにおける安楽死問題に関するシンポジウムが開かれた。これに続いて2000年には国際シンポジウム「強制断種からナチズムへ」が開かれた(文献14)。こうした研究成果を引き継いで、2007年には19-20世紀転換期から1945年へと射程を拡大した論集が刊行された(文献2)。大まかに言うと、これらの諸研究は、オーストリアにおける優生思想の顕著な特徴、つまり優生学系の思想や運動の多様性—それは「優生学」に相当する言葉が複数用いられていたことにもっとも明確に現れている—が、高度に人種主義的なナチスの優生思想の受容を阻害したことを明らかにしてきた。

以上のように、オーストリアに関する研究も近年、急速に進展してきた。しかし、これまでの研究をリードしてきたバーダー(G.Baader)やエクスナー(F.Exner)らが指摘するように、オーストリアにおける優生思想・優生政策の歴史は明らかにされ始めたばかりである。とくに多くの研究は特定人物の言説分析を中心としており、政策や実践面に関する実証研究はこれからの課題として残っている。

2. 研究の目的

以上の研究状況を受け、本研究では戦間期のオーストリアにおける児童保護および家族援助をフィールドとして、オーストリアにおける優生思想

の「実践」を解明することを目的とした。乳児保護・家族援助を題材とする理由は、同時代のオーストリアにおける優生思想を代表する人物たちがこれを「人口の質的向上」の起点と考え、協会ネットワークや自治体レベルでの政策や実践に参加したからである。本研究では代表的な思想家だけでなく、医療従事者、人口統計学者そしてソーシャル・ワーカーによる協会レベルおよび自治体レベルでの実践に注目した。政治陣営間の相違や相互関係に加え、本研究ではこれまでの研究で十分に追求されていない農村地域での実践における優生思想の影響を析出しようと試みた。

本研究の特色は、まずもってこれまで十分に追求されないままであったオーストリアの優生思想の歴史的展開を明らかにすることにあつた。

研究開始当初、これまで報告者が取り組んできた19-20世紀転換期以後のオーストリアにおける児童福祉実践と地域社会に関する研究の知見と、先述の近年の研究成果を併せ、オーストリアにおいては言説の状況と同様に、ドイツや北欧諸国に比べ児童保護や家族援助の実践に優生思想が反映されていないこと、またその受け入れ方には濃淡があり地域的な偏差が大きいのではないかと推測した。この受容の「阻害」要因は、政治陣営による組織的分裂だけでなく、「伝統的」に人々に根付いた人口再生産への思想や遺伝的決定を主軸とする優生学に対抗的な精神分析学の影響下にあつた児童心理学の影響に起因していたのではないかと見通した。

しかし、後の「研究の成果」でも述べるように、研究開始時の推測は必ずしも正しくなかった。本研究で追求した限りにおいて、戦間期オーストリアでは人口学者や医療専門職者、行政官といった言説上の先導者が優生学的言論を展開しながらも「優生学 (Eugenik)」という表現を使うことにすら消極的だった一方で、児童福祉の実践現場こそが現場の問題解決のために「優生学」という科学的知見を呼び寄せたと考えられるのである。この点は「研究の成果」で詳述したい。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の整理

本研究目的に関連する46点の文献および論文を入手し、先行研究の分析および整理を行った。

(2) 史資料の分析

オーストリアにおいて同時代文献を中心に71点の資料を入手し、整理と分析を行った。

4. 研究成果

(1) 優生思想ネットワーク

先にも述べたようにオーストリアの優生思想は、全体を見通し難いものである。本研究ではまず本研究テーマに関わる研究文献を総合的に分析し、優生学ネットワークと児童福祉のネットワークの関連性を明らかにした。

1935年、優生学の国際雑誌 *Eugenic Review* 誌は、「オーストリアには優生学の調査および教育の中央組織がない」「一般紙も優生学には興味関心を示さない。全般的にしる、部分的にしる優生学を専門とする学術ジャーナルもない」と評した²。言い換えれば「オーストリア的優生学」というような、ナショナルなレベルでの統一的組織や運動は見出しにくい。オーストリアの優生思想は、内容としても組織としても分裂していた。こうした状況は「優生学(Eugenik)」に相当する表現が多数あつたことからわかる。オーストリアの優生学ネットワークを明らかにしたマイヤー (Th.Mayr) の調査によれば、「遺伝-人種生物学(Erb- und Rassenbiologie)」「生殖衛生学(Fortpflanzungshygiene)」等々、18の表現が実際には「優生学」と互換可能な言葉として用いられたことを明らかにしている³。

こうした分裂の背景には、オーストリアという国家あるいは「国民」そのものの立ち位置（あるいは立ち位置のなさ）があつたといえよう。

一方には、ドイツ (ワイマール共和国) で隆盛した、断種や不妊手術を優生政策の主たる手段とみなすメンデル主義的でネガティブな優生学があつた。とくにこの影響を受けたのが、アルプス東南部のグラーツ大学医学部を中心としたネットワークである。図1にもあるように、グラーツ人種衛生協会はウィーンの協会よりも早くドイツ人種衛生協会に加盟していた。

もう一方には、断種をはじめとする生殖への医療的関与を忌避するカトリック思想があつた。こ

の影響はたしかに強く、明示的に「優生学」という表現を使うことは回避されたため、表現の多様性あるいは分裂が生じたともいえる。また、表現と同様に優生学系の組織も統一されていなかった。

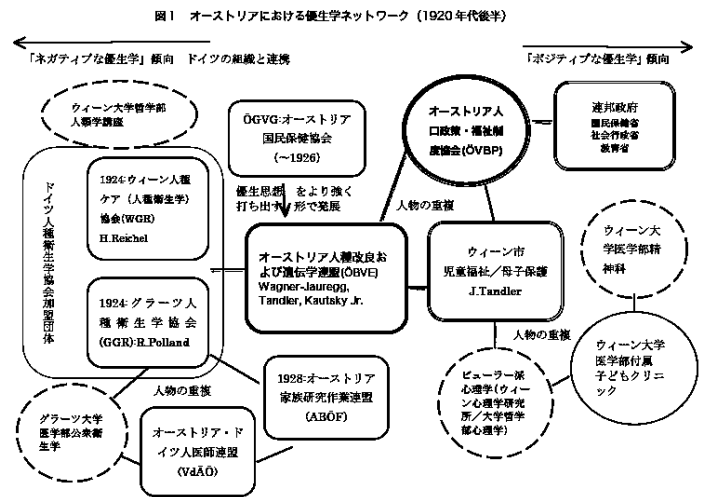
こうした状況を踏まえ先行研究は、考察対象を限定して分析を進めてきた。もっとも早い段階では、1988年にバイヤーが社会民主党の福祉政策と優生学の関係进行分析した(文献8)。2000年代に入るとさらに人類学についてはフックス(B.Fucks)(文献11)、医療についてはヴォルフ(M.A.Wolf)(文献29)、人口学についてはエクスナー(F.Exner)ら(文献11)、カトリック(とくに医療について)についてはレッシャー(M.Löscher)(文献14)が、それぞれ実証的なモノグラフを著している。

それと同時に、先のマイヤーはそれぞれの専門分野の人物や組織がいかに関係していたのかを追求し、オーストリアにおける優生学ネットワークの存在を明らかにした(文献19, 21)。図1はマイヤーによる研究をもとに、報告者がまとめたものである。図の右側が、ドイツの動きと連動し「メンデル主義的」でネガティブな優生学を支持するグループであり、オーストリアにおいては少数派であった。とくにグラーツ大学医学部とウィーン大学哲学部人類学研究所が中心となっていた。フェルキッシュな傾向の強いレツヒェ(O.Reche)ライヒェルや社会主義者でもあった(W.Reichel)らが代表的人物である。

図の左側が主流派であり、ネオラマルク主義的傾向が強く、遺伝の生物学的医学的操作により個人・集団の「質の向上」を目指すという意味⁴でのいわゆるポジティブな優生学を志向する組織や個人である。このなかにはノーベル生理学賞の受賞者でもあるヤウレグ(W.Jauregg)、オーストリア第一共和国初代大統領のハイニッシュ(M.Hainisch)、「赤いウィーン」において福祉政策を指導したタンドラー(J.Tandler)など同時代の公衆衛生政策や福祉政策に直接関わった人物がいた。

この図からもわかるように、オーストリアの優生学は分裂的でありながら、あるいはあったがゆえにネットワークを形成していた。戦間期オーストリアに特徴的な政治的対立も「科学」の中立性と

いう前提のもとで党派的には対立する人物たちが同じ組織に属することもまれではなかった。こうした緩やかな結びつきが、同時代に現れた様々な優生思想を取り込んでいくネットワークを形成したといえよう。



(2) 優生学ネットワークにおける児童福祉の接近

優生学が、目的としても手段としても生殖の人為的操作を中核としていたことから考えれば当然の帰結であるが、児童福祉の人的／組織的ネットワークと優生学ネットワークはかなりの部分で重複していた。1924年には、帝政期から児童福祉の中心的組織であった「児童保護・家族および職業福祉中央協会(Zentralstelle für Kinderschutz, Familien- und Berufsfürsorge, 以下、ZfKFB)」とÖVBP(図1参照)は合同で「福祉会議」を開催している。ただし、当時の児童福祉における中心的課題、すなわち「教育困難な子ども」や非行問題、障がい者福祉への解決策として、明示的に遺伝と結びつけ優生学的手段を提起するものはほとんどなかった(唯一、「遺伝性梅毒」についての講演があった)⁵。以上のように、本研究では、ZfKFBの機関誌やÖVBPの関連文献の分析を通して、オーストリアでは、他の地域においては優生政策の最前線ともなった児童福祉の個別分野—障がい児へのケアや非行—に対する優生学的手段の適用への抑制的傾向が見られたことを確認した。

(3) 「子どもの権利」保護と優生学

しかしながら、オーストリアの児童福祉において優生思想的な思考枠組みがまったく見られないというのは誤りである。とりわけ「子どもの権利」

保護という局面において、優生思想の開拓した手法や理論枠組みが積極的に導入された。ここでいう「子どもの権利」保護とは、主として父親に対する養育費請求権の行使を指している。この点を理解するためには、まず20世紀前半のオーストリアにおける婚外子の状況をみなければならない。

20世紀前半、オーストリアはヨーロッパのなかでも婚外出生率が高いことで知られていた。婚外出生率は国内でも地域的偏差も大きく、アルプス東南部地域がもっとも高かった。第一次世界大戦後には徐々に低下しはじめるが、「婚外子問題」は当時の人口学者にとって最大の課題のひとつであった。事実、先に述べた1924年の「福祉会議」の講演では、優生学ネットワークでも有力な人口学者ヘッケ(W.Hecke)は、人口回復の切り札として婚外子の生活環境や教育状況の改善を訴えた⁶。また、24年の「福祉会議」では、婚外出生率のもっとも高い地域(シュタイアーマルクの州都グラーツ)の市児童福祉局長は、現場の声として婚外子への権利保護と福祉を強く訴えた。具体的にいえば、婚外子福祉とは、父親の捜索と確定、そして確実な養育費の徴収であった⁷。

こうした児童福祉の現場での困難に答えたのが、優生思想ネットワークでも少数派であったレッヒェらのグループであった(図1参照)。1925年辺りから、レッヒェは裁判所と協力して裁判官の指針となるような親子鑑定における人類学的・遺伝生物学的調査を開始した。血液型鑑定が最初的手段であったが、さらには、これまでアカデミックな場に限られていた人類学の「形態学的分析」を、裁判に應用しようとしたのである⁸。

1929年ごろになると、ZfKFBの機関誌で父親(親子)鑑定裁判に関する記述が増加しはじめた。ZfKFB内でも、その是非についての議論が行われ、証拠として即採用されたわけではなかったが、徐々にその影響力が拡大していった⁹。

1931年には、レッヒェがドイツに去ったのち後継者となったヴェニンガー(O.Weninger)が裁判に耐えうるよう分析を精緻化するため、人類学講座内に「遺伝生物学研究チーム」を創設した。同じ頃には、裁判所が「遺伝生物学的鑑定」を求めることが常態化した。「遺伝生物学研究チーム」は

さらなる活動の場を広げ、親子鑑定の対象者だけでなく、犯罪者・戦争障害者・精神病患者等について遺伝生物学的な家族調査が体系的に行われるようになっていた。

以上のように、本研究では児童福祉の実践現場こそが現場の問題解決のために「優生学」という科学的知見を呼び寄せたことを明らかにした。そして、また、この動きの発端がオーストリア共和国には不釣り合いなほど巨大なウィーンという「中央」ではなく、「周縁」の「婚外子問題」にあったことも注目に値する。

こうした成果とともに、本研究を通して新たな課題も見えてきた。それは子どもの国外強制送還(引き取り)と、優生学的手法(「遺伝学的手法」)の関係である。この点に関しては、今後の研究で追求していきたい。

なお、第三者評価を受けるために、2014年10月に奈良女子大学で開催された東欧史研究会・ハプスブルク史研究会の合同研究会にて本研究結果を報告し、有益な助言を得た。また、研究成果の一部は、「主な研究発表等」に挙げた著書に反映させた。2015年度中には、より総合的に第三者評価をうけるため歴史学専門誌に投稿する予定である。

(4) 本テーマに関わる文献

1. Baader, Gerhard/ Veronika Hofer, Thomas Mayer(Hg.)(2007), *Eugenik in Österreich. Biopolitik Strukturen von 1900 bis 1945*, Czernin Verlag, Wien.
2. Bashford, Alison/ Philippa Levine(2010), *The Oxford Handbook of the History of Eugenics*, Oxford UP, New York.
3. Benetka, Gerhard(Hg.)(2007), *Verfolgte Kindheit: Kinder und Jugendliche als Opfer der NS-Sozialverwaltung*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar
4. Berger, Ernst(Hg.)(2007), *Verfolgte Kindheit. Kinder und Jugendliche als Opfer der NS-Sozialverwaltung*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar.
5. Bischof, Günter/ Anton Pelinka/ Dagmar Herzog(eds.)(2007), *Sexuality in Austria. Contemporary Austrian Studies vol. 15*, Transaction Publishers, New Brunswick, New Jersey.
6. Borowy, Iris/ Wolf D. Gruner(eds.)(2005), *Facing Illness in Troubled Times*, Peter Lang, Frankfurt am Main.
7. Brandstetter, Thomas/ Dirk Rupnow/ Christina Wessely(Hg.)(2008), *Sachunterreich. Fundstücke aus der Wissenschaftsgeschichte*, Löcker, Wien.
8. Byer, Doris(1988), *Rassenhygiene und Wohlfahrtspflege. Zur Entstehung eines sozialdemokratischen Machtsdispositivs in Österreich bis 1934*, Campus, Frankfurt/ New York.
9. Dietzel, Kerstin(2013), Fremdbetreuung von Kindern in NS-Fürsorgeheimen, in: Wolf, Maria A./ Elisabeth Dietrich-Daum/ Eva Fleischer/ Maria Heidegger(Hg.), *Child Care. Kulturen, Konzepte und Politiken der Fremdbetreuung von Kindern*, Beltz Juventa, 202-215.
10. Exner, Gudrun/ Josef Kytir/ Alexander Pinwinkler(2004), *Bvölkerungswissenschaft in Österreich in der Zwischenkriegszeit(1918-1938). Personen, Institutionen, Diskurse*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar.

11. Fuchs, Brigitte(2003), >>Rasse<<, >>Volk<<, *Geschlecht. Anthropologische Diskurse in Österreich 1850-1960*, Campus, Frankfurt/ New York.
12. Gabriel, Heinz Eberhard/ Wolfgang Neugebauer(2005), *Vorreiter der Vernichtung? Eugenik, Rassenhygiene und Euthanasie in der österreichischen Diskussion vor 1938*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar.
13. Logan, Cheryl(2013), *Hormones, Heredity, and Race. Spectacular Failure in Interwar Vienna*, Rutgers UP, New Brunswick/ New Jersey/ London.
14. Löscher, Monika(2009), "...der gesunden Vernunft nicht zuwider..."? *Katholische Eugenik in Österreich vor 1938*, Studien Verlag, Innsbruck/ Wien/ Bozen.
15. Mayer, Thomas(2005), Eugenische Initiativen und Netzwerke in Österreich von 1918 bis 1945, in: *Virus. Beiträge zur Sozialgeschichte der Medizin*, 5, 43-80.
16. Mayer, Thomas(2007), Eugenik in Graz oder Grazer Eugenik? Versuche über eine Standortbestimmung eugenischer Positionen und Aktivitäten in der Zwischenkriegszeit, in: *Virus. Beiträge zur Sozialgeschichte der Medizin*, 7, 117-130.
17. Mayer, Thomas(2009), Eugenische Netzwerke im Österreich der Zwischenkriegszeit, in: Wecker, Regina/ Sabine Braunschweig/ Gabriela Imboden/ Bernhard Küchenhoff/ Hans Jakob Ritter(Hg.), *Wie nationalsozialistisch ist die Eugenik? (What is National Socialist about Eugenics?)*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar, 219-232.
18. McEwen, Britta(2012), *Sexual Knowledge. Feeling, Fact and Social Reform in Vienna, 1900-1934 (Austrian and Habsburg Studies 13)*, Bergjain Books, New York/ Oxford.
19. Mesner, Maria(2010), *Geburten/Kontrolle: Reproduktionspolitik im 20. Jahrhundert*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar.
20. Obrowsky, Louis(2005), *Historische Betrachtung der sozialmedizinischen Einrichtungen in Wien vom Beginn des 20. Jahrhunderts bis zum Ende der Ersten Republik*, PETER LANG, Frankfurt a.M..
21. Oelschläger, Thomas,(2001) Zur Geschichte der „Kinderabteilung“ des „Reichsgau Steiermark“, in: Freidl, Wolfgang/ Alois Kernbauer/ Richard H. Noack/ Werner Sauer(Hg.), *Medizin und Nationalsozialismus in der Steiermark*, Studien Verlag, Innsbruck/ Wien/ München/ Bozen, 119-135
22. Sablik, Karl(1983), Julius Tandler. Mediziner und Sozialreformer, A. Schendl, Wien.
23. Sieder, Reinhard(2014), Das Dispositiv der Fürsorgeerziehung in Wien, in: *Österreichische Zeitschrift für Geschichtswissenschaften*, 25(1+2), 156-193.
24. Teschler-Nicola, Maria(2003), Der diagnostische Blick – Zur Geschichte der erbbiologischen und rassenkundlichen Gutachtertätigkeit in Österreich vor 1938, in: *Zeitgeschichte*, 30(3), 137-149.
25. Turda, Marius(2010), *Modernism and Eugenics*, Palgrave Macmillan, London.
26. Turda, Marius/ Paul Weindling,(2007), „*Blood and Homeland*“. *Eugenics and Racial Nationalism in Central and Southeast Europe, 1900-1940*, Central European UP, Budapest/ New York.
27. Turner, Christopher(2011), *Adventures in the Orgasmatron. How the sexual Revolution came to America*, Farrar, Straus and Giroux, New York.
28. Weindling, Paul, A City Generated: Eugenics, Race and Welfare in Interwar Vienna, in: Holmes, Devorah/ Lisa Silverman(eds.)(2009), *Interwar Vienna. Culture between Tradition and Modernity*, CamdenHouse, Rochester(New York), 81-116.
29. Wolf, M. Maria(2008), *Eugenische Vernunft. Eingriffe in die reproduktive Kultur durch die Medizin 1900-2000*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar.

【脚注】

- ¹ Weindling, Paul, A City Generated: Eugenics, Race and Welfare in Interwar Vienna, in: Holmes, Devorah/ Lisa Silverman(eds.)(2009), *Interwar Vienna. Culture between Tradition and Modernity*, CamdenHouse, Rochester(New York), 81-116
- ² Eugenics in Austria, in: *Eugenik Review*, vol.XXVI,

No.4(1935), 259-261.

³ Mayer, Thomas(2009), Eugenische Netzwerke im Österreich der Zwischenkriegszeit, in: Wecker, Regina/ Sabine Braunschweig/ Gabriela Imboden/ Bernhard Küchenhoff/ Hans Jakob Ritter(Hg.), *Wie nationalsozialistisch ist die Eugenik? (What is National Socialist about Eugenics?)*, Böhlau, Wien/ Köln/ Weimar, 219-232

⁴ 様々な地域での優生学研究が進むにつれ「優生学」の定義は困難になっている。トゥルダは最大公約数的な特徴として1) 個人の身体的な状況を決定する上で遺伝が決定的な役割を果たすことを思想的基盤とすること、2) 生物学、医学、国民の健康がリンクすること、3) 科学の政治化が見出されること、を挙げている。

Turda, Marius(2010), *Modernism and Eugenics*, Palgrave Macmillan, London, 7

⁵ VI. Fürsorgetagung, in: *Zeitschrift für Kinderschutz, Familien- und Berufsfürsorge*, 16(1924), 101-135

⁶ Hecke, Wilhelm(1919), *Am 7. und 8. April 1919 im Saale der Gesellschaft der Ärzte in Wien veranstaltete Tagung über die Fragen der Kinderaufzucht. Das Säuglings- und Kleinkindesalter*, Wien

⁷ Glesinger, Rudolf, Erziehungsfürsorge und Rechtsfürsorge im Jugendamt, in: *Zeitschrift für Kinderschutz, Familien- und Berufsfürsorge*, 16(1924), 126-128

⁸ Reche, Otto/ Rolleder Anton(1964), Zur Entstehungsgeschichte der ersten exakt wissenschaftlichen erbbiologisch-anthropologischen Vaterschaftsgutachten, in: *Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie*, 55, 284-285, Fuchs, Brigitte(2003), >>Rasse<<, >>Volk<<, *Geschlecht. Anthropologische Diskurse in Österreich 1850-1960*, Campus, Frankfurt/ New York, 273

⁹ ZfKFB の機関誌上において人類学の研究手法を流用した父親鑑定についてのもっとも初期の記事は以下。Zur Frage des anthropologischen Gutachtens im Vaterschaftsprozess, in: *Zeitschrift für Kinderschutz, Familien- und Berufsfürsorge*, 21(1929), 190-191

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

江口布由子「戦間期オーストリアにおける優生学と児童福祉——ナチス優生政策はなぜ迅速に受け入れられたのか——」(2014.10.11 奈良女子大学 東欧史研究会・ハプスブルク史研究会 合同研究会)

〔図書〕(計2件)

江口布由子 「第16章 新しい国家、健やかな子」大津留厚ほか(編)『ハプスブルク史研究入門』(昭和堂 2013) 217-227

江口布由子「近現代オーストリアにおける子どもの遺棄と保護」橋本伸也ほか(編)『保護と遺棄の子ども史(叢書・比較教育社会史)』(昭和堂 2014) 153~181

江口布由子 「(書評) タラ・ザーラ著『彷徨する子どもたち——第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建 (Tara Zahra, *The Lost Children: Reconstructing Europe's Families after World War II*. Harvard University Press 2011)』」『東欧史研究』35号 (2013) 124~130

6. 研究組織

研究代表者 江口 布由子(EGUCHI Fuyuko)
高知高専 総合科学科 准教授
研究者番号 20531619